

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320064

研究課題名(和文) 東欧文学における「東」のイメージに関する研究

研究課題名(英文) Studies on Images of "East" in East European Literature

研究代表者

阿部 賢一 (ABE, Kenichi)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：90376814

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,400,000円

研究成果の概要(和文)：国民文学の枠組みでの研究、あるいは同様な枠組み同士の比較検討がこれまで主流であったが、本研究はそのような国民文学の枠組みから逸脱する3つの視点(「移動の文学」、「文学史の書き換え」、「マイクロ・ネーションの文学」)に着目し、個別の現地調査の他、国内外の研究者とともに研究会、シンポジウムを開催した。その結果、3つの視点の有効性を確認できたほか、シェンゲン以降の移動の問題(政治学)、国民文学史の位相(歴史学)、マイノリティの記述の問題(文化研究)といったそのほかの問題系およびほかの研究分野と隣接している問題点や研究の可能性を国内外の研究者と共有し、一定の成果をあげた。

研究成果の概要(英文)：Since the fall of the Berlin Wall, approaches to East European literature have diversified into topics of Gender Studies, Postcolonial Studies, etc. It seems, however, that most of the discussions are held under the framework of "National Literature." In this context, our research focuses on three perspectives that go beyond this framework: 1. Journeys and Migration in Literature, 2. Rewriting Literary History, and 3. Literature of Micro-Nations. After three years of research, including an international conference and several seminars with international guests, we have reached the conclusion that these perspectives are valid for further research. They provide us with constructive viewpoints that act as a median between world literature and national/regional literature.

研究分野：文学

キーワード：東欧文学 移動 文学史 ミクロ・ネーション 中欧文学

1. 研究開始当初の背景

(1)冷戦構造が崩壊した1990年以降、旧共産圏の文学活動を総体として捉える試みは、2000年代以降、旧東欧の多くの国々がEUに加盟するなど、「東欧」という枠組みが失効したのに伴い、減少傾向にあった。「東欧」という表現に「共産圏」という過去概念が含意され、多くの研究者がこの用語を忌避するようになったことも関係している。

(2)文学研究をめぐる状況も、ダムロッシュらによる「世界文学」の議論が活発になり、従来の「国民文学」あるいは「国民文学」の比較を想定する「比較文学」の限界も指摘されるようになった。旧東欧圏の文学研究も活性化しているとはいえ、国内外ともに、従来の「言語」や「主題」に限定するアプローチが主であり、「旧東欧圏」という総体的な枠組みでの考察はきわめて限定的であった。

2. 研究の目的

(1)本研究では、国民文学の枠組みでは見えてこない東欧文学の特徴として以下の3点を検討することを主たる目的とする。

「移動の文学」: 国民文学という枠組みとの関連において、近年、盛んに行なわれているのがいわゆる「移民文学」の研究である。だが多くの場合、「ホスト国」と「移民」という二項対立的な関係性の解釈に終始しており、作品分析が時として平板的なものとなっている。そこで、本研究では、イディッシュ語やロマ二語の文学作品、さらには、「紀行文学」のテキスト群を含めて、「移動の文学」と位置付け、これらの作品の、土地に対する流動的・相対的な意味付けに着眼し、空間認識がどのように作用しているか、とりわけ、「東」イメージの生成と流通について、検討を行なうこととする。

「文学史の書き換え」: 東欧地域は「西」(ドイツ、ハプスブルグ帝国)と「東」(ロシア、オスマン・トルコ)などの大国にはさまれ、またそれらに編入されたり、境界が何度も引き直されることによって形成されてきた。新たな線引きがなされるたびに、地域のアイデンティティも変容する。それが地域や作家に後付けの自己像を与える「文学史の書き換え」という現象については本格的な研究は少ない。こうした東欧文学におけるアイデンティティを生み出す際に大きな影響力を持つ「西」と「東」という価値判断の変容のプロセスとメカニズムを明らかにする。

「ミクロ・ネーションの文学」: 既成の枠組みの中ではネーションとは見なされないような小集団が散在するのが東欧圏の特徴のひとつであるが、個別の事例調査を超える

ような横断的な研究は今までなされてこなかった。本研究ではそのような「ミクロ・ネーションの文学」を東欧文学という大きな文脈の中に位置付けることにより、それらが人間の移動によって生まれる「移動の文学」、土地のアイデンティティが書きかえられることで生じる「文学史の書き換え」の双方の特徴をもっとも極端な形であらわにしている点を明らかにする。

(2) 以上、最終的にはこれらの研究の蓄積を踏まえ、東欧圏の現代文学における「東」イメージの生成、流通、分布について検討を行ない、地政学的、文化的概念としての「東」という概念が東欧圏において変容していく様相を明らかにする。第一に、地理空間的に捉えられる東のイメージを分析する。第二に、否定的に捉えられる一方でノスタルジーを喚起する場合もある社会主義時代の記憶と結びついた遊及的な東のイメージを扱う。また、東欧圏において東を象徴する記号となっているロマのイメージについても着目する。

3. 研究の方法

(1)本研究は、従来の研究で見られたような東欧における各国文学の比較研究を対象とするのではなく、東欧における現代文学の横断的な現象を中心に考察を行なう。具体的には、「移動の文学」、「文学史の書き換え」、「ミクロ・ネーションの文学」の3点である。従来は国民文学の枠組みでの研究が支配的であり、そのような枠組み内あるいは枠組み同士の比較検討が主流であったが、本研究ではそのような国民文学の枠組みから逸脱する3つの事象に着眼し、研究の主軸を構成する。

「移動の文学」では、これまで「亡命文学」「移民文学」として扱われてきた作品のみならず、移動の象徴性を担っている「ロマ作家」による文学および紀行文学を射程に収め、移動にまつわるさまざまな現象を検討していく。

「文学史の書き換え」では、「移動の文学」、「ミクロ・ネーションの文学」との関連において、「各国文学史」、「社会主義時代の文学」といった既存の枠組みに揺さぶりをかける概念構築を検討する。

「ミクロ・ネーションの文学」では、国民国家の成員として十全に認められていない言語文化をクローズ・アップして、その様相を検討していく。

(2)以上の視点をすべての研究分担者間で共有し、現地調査のみならず、学会、研究会、シンポジウムなどの場において本研究の可能性を国内外の研究者と議論する。

4. 研究成果

(1)まず、3年間にわたる研究を通して、個別の文学研究では十分に検討することのできない、現代「東欧文学」の全体的な傾向について検討を深めることができた。ポーランド文学、チェコ文学といった国民文学の枠組みを越えた共同研究を遂行したことによって、研究手法として提示した「移動の文学」、「文学史の書き換え」、「ミクロ・ネーションの文学」の3つの視点の有効性を確認できた。これらの視点は、シェンゲン以降の移動の問題（政治学）国民文学史の位相（歴史学）、マイノリティの記述の問題（文化研究）といったそのほかの問題系およびほかの研究分野と隣接しており、単なるテキスト研究だけではない、立体的なアプローチの可能性を確認することができた。また研究対象を文学テキストに限定せず、映画・美術といった領域にも射程を広げることで文学テキストの位相がその他の表現分野とも密に関連していることがわかった。

(2)「東欧文学」をミラン・クンデラが提唱した概念「中位のコンテキスト」として措定することによって、単なる広域的な地域研究の概念としてだけでなく、文学研究における読解のモードの可能性を提示することができたように思われる。具体的には、国民文学と世界文学の中間に位置する「中位のコンテキスト」の研究としての可能性を確認することができた。この概念によって、ローカルな文学研究とグローバルな文学研究の中間に位置する中域的な地域・文化的な総体が、現代の文学研究のひとつの参照概念として機能することを提示できた。

(3)本研究は、従来の文献学的なアプローチに見られるテキストを中心とする研究だけではなく、現在活躍中の現代作家たちの声を集積する点にも重きを置いた。複数にわたる講演会・シンポジウムを開催し、日本の読者・研究者と直接交流する機会を設けたほか、講演原稿等を報告書に掲載し、国内外の研究者に広くアピールすることが可能になった。

(4)最終年度には、英語での国際シンポジウムを立教大学にて開催し、それぞれの研究者たちと活発な議論を交わしたほか、本研究の意義を対外的にも確認することができた。同シンポジウムおよび本科研の主要な成果は、欧文の報告書として、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターより、2015年夏に刊行およびウェブ上で公開される予定になっている。これにより、本研究の成果を対外的に発信することが可能となる。

また複数の講演会やシンポジウムを開催したことで、文学研究を中心としながらも、言語学、社会学、美術史、映画研究など、多岐にわたる研究者を招き、「東欧文化研究」の研究者の国際的なネットワークの構築に寄与し、学際的な研究の発展の一助となった。

(5)以上、3年のあいだにきわめて著しい研究成果を上げることができたように思われるが、このようなアプローチが今回初めてであったこと、また研究分担者および予算が限定的であったため、十分に研究が進まなかった点があるのも事実である。またオーラル・アーカイブについては資料の蓄積は行われたものの、公開にまではいたらなかった。これらの課題は、新たに採択された科研によって克服し、さらに研究を進めていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計26件)

Tomasz Kamusella, Motoki Nomachi, The Long Shadow of Borders: the Case of Kashubian and Silesian in Poland, Eurasia Border Review, 査読有, vol.5-2, 2014, 35-59

越野 剛, ハティン虐殺とベラルーシにおける戦争の記憶、地域研究、査読有、14-2巻、2014、75-91

加藤 有子, ポーランド・ウクライナ国境地帯からみた「ヨーロッパ」 ユーリイ・アンドルホヴィチとアンジェイ・スタシクの中欧論、現代思想、査読無、42(10)巻、2014、164-174

井上 暁子, 1980年代以降のポーランド語文学におけるドイツ/ポーランド国境地帯の表象 移動作家の視点から、日本ロシア文学会関東支部報、査読有、32巻、2014、33-36

小椋 彩, 『シベリアのレッスン』: ドキュメンタリーフィルムとポーランドの「小さな祖国」、映像の中の冷戦後世界 ロシア・ドイツ・東欧研究とフィルムアーカイブ、査読無、1巻、2013、97-109

野町 素己, 東欧にかかる言葉の虹 - オンドラ・ウィソホルスキとその言葉 -、東欧地域研究のいま-トランステリトリアルな視点から、査読有、1巻、2012、204-224

[学会発表](計49件)

Go Koshino, Belarusian Literature Written in Russian: the Case of Belarusian Jewish Writer Grigory Reles, International Symposium "Images of East European Literature: The Variable and Invariable in the Past and Present", 2014.9.28, Rikkyo University (Tokyo, Toshima-ku)

阿部 賢一、「空いている椅子」、あるいは、リハルト・ヴァイネルの「書かないことの不可能性」をめぐって、世界文学・語圏横断ネットワーク第一回研究会、2014年9月23日、立命館大学衣笠キャンパス（京都府・京都市）

〔図書〕（計11件）

柴宜弘、木村真、奥彩子、井上 暁子 他14名、山川出版社、東欧地域研究の現在、2014、366(83-99)

望月哲男、越野 剛 他6名、ミネルヴァ書房、ユーラシア地域大国の文化表象、2014、274(154-173)

Katarzyna Bazarnik、Izabela Curylio-Klag、Ariko Kato 他7名、Cambridge Scholars Publishing、Incarnations of Material Textuality: From Modernism to Liberateure、2014、165(15-34)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部 賢一 (ABE, Kenichi)
立教大学・文学部・准教授
研究者番号：90376814

(2) 研究分担者

小椋 彩 (OGURA, Hikaru)
東京大学・人文社会系研究科・研究員
研究者番号：102438997

井上 暁子 (INOUE, Satoko)
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：20599469

加藤 有子 (KATO, Ariko)
名古屋外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号：90583170

野町 素己 (NOMACHI, Motoki)
北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・准教授
研究者番号：50513256

越野 剛 (KOSHINO, Go)
北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・准教授
研究者番号：90513242